

令和七年度 入学者選抜試験問題（現代の国語）

一

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。なお設問の都合上表記を改めたところがあります。

松茸の出るころになるといつも思い出すことであるが、茸という物が自分に対して持っている価値は子供時代の生活と離れ難いように思われる。トルストイの確かな戦争と平和だったかにそういう意味で茸狩りの非常に鮮やかな描写があったと思う。

自分は山に近い農村で育ったので、秋には茸狩りが最上の楽しみであった。何歳のころからそれを始めたかは全然①キョクがないが、小学校へはいるよりも以前であることは確かである。（中略）

こういう茸狩りにおいて出逢う茸は、それぞれ品位と価値とを異にするように感じられた。初茸はまことに愛らしい。ことに赤みの勝った、笠を開かない、若い初茸はそうである。しかし黄茸の前ではどうも品位が落ちる。黄茸は純粋ですっきりしている。が、白茸になると純粋な上にさらに豊かさがあった、ゆつたりとした感じを与える。しめじ茸に至れば清純な上に一味の神秘感を湛えているように見える。子供心にもこういうふうな感じの区別が実際あったのである。特にこれらの茸と毒茸との区別は②ケンチヨに感ぜられた。赤茸のような鮮やかな赤色でもかつて美しさを印象したことはない。それは気味の悪い、嫌悪を催す色であった。ストウシやヌノビキなどは毒茸ではなかったが、何人かを引きつけることはなかった。

子供にとって茸の担っていた価値はもっと複雑な区別を持っていたのであるが右にあげただけでもそう単純なものではない。このような区別は希少性の度合からも説明し得られるであろう。（1）希少性だけがその規定者ではなかった。どんなに珍しい種類の毒茸が見いだされたとしても、それは毒茸であるがゆえに非価値的なものであった。では何が茸の価値とその区別とを子供に知らしめたのであろうか。子供の価値感がそれを直接に感得したのであろうか。（2）色の美しさ、その決定者であったならば、そうも言えるであろう。しかし赤茸の美しい色は非価値であった。色の美しさではなく味の、よきに着目するとして、子供には初茸の味と毒茸の味とを直接に弁別するような価値感は存せぬのである。茸の価値を子供に知らしめたのは子供自身の価値感ではなくして、彼がその中に生きている社会であった。（3）村落の社会、特に彼を育てる家や彼の交わる仲間たちであった。さまざまの茸の中から特に初茸や黄茸や白茸やしめじ茸などを選び出して彼に示し、彼に味わわせ、またそれを探し求める情熱と喜びとを彼に伝えたのは、彼の親や仲間たちであった。言いかえれば、社会的に成立している茸の価値を彼は教え込まれたのである。それと同時に彼はまたいずれの茸がより多く③パンチウセられるかをも仲間たちから学んだ。年長の仲間たちがそれを見いだした時の喜び方で、彼は説明を待つまでもなくそれを心得たのである。

しかし④それは茸の価値が彼の体験でないという意味ではない。教え込まれた茸の価値はいわば彼に探求の目標を与えたのであった。すなわち彼を茸狩りに発足せしめたのであった。それから先の茸との交渉は厳密に彼自身の体験である。茸狩りを始めた子供にとっては、彼の目ざす茸がどれほどの使用価値や交換価値を持つかは、全然問題でない。彼にはただ「探求に価する物」が与えられた。そうして子供は一切を忘れて、この探求に自己を投入するのである。松林の下草の具合、土の感じ、灌木の形などは、この探求の道においてきわめて⑤イレビソに子供によって観察される。茸の見いだされ得るような場所の感じが、はつきりと子供の心に浮かぶようになる。彼は（4）漫然と松林の中に茸を探すのではなく、松林のこのこかしこに散在する茸の国を訪ねて歩くのである。その茸の国で知人に逢う喜びに胸をときめかせつつ、彼は次から次へと急いで行く。ある国では寂として人影がない。⑥他の国ではにぎやかに落ち葉の陰からほほえみ掛ける者がある。そのたびごとに子供は強い寂しさや喜びを感じつつ、松林の外の世界を全然忘れていく。⑦そういう境地においては実際に初茸は愛らしく、黄茸は品位があり、白茸は豊かであり、しめじは貴い。こういう価値の感じは仲間に加え込まれたのではなくして彼自身が体験したのである。彼は自らこの探求に没入することによって、教えられた価値を彼自身のなから彼自身のものとして体験した。そうしてこの体験は彼の⑧シヨウガイを通して消え失せることがない。

そこで振り返って見ると、茸の価値をこの子供に教えた年長の仲間たちも、同じようにそれぞれの仕方においてこの価値を体験していたのであった。そうしてその体験の表現が、（5）茸狩りにおける熱中や喜びの表情が、彼に茸の価値を教えたのである。だからここに茸の価値と言われるものは、この自己没入的な探求の体験の相続と繰り返しにはかならぬのであって、価値感という作用に対応する本質というごときものではない。茸の価値は茸の有り方であり、その有り方は茸を見いだす我々人間の存在の仕方にもとづくのである。

ここに問題とした茸の価値は、茸の使用価値でもなければまた交換価値でもない。が、これらの価値の間に一定の連関の存することは否み難いであろう。いわゆる「価値ある物」は何ほどかこの④茸と同じき構造をもつと言つてよい。

和辻哲郎「茸狩り」

問一 傍線部①の内容を三十字以内で説明しなさい。句読点等も一字に数えます。

問二 傍線部②の修辭法として最も適切なものをア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 象徴法 イ 反語法 ウ 擬人法 エ 反復法 オ 連鎖法

問三 傍線部③の意味として最も適切な語句を問題文から十五字以内で抜き出して書きなさい。句読点等も一字に数えます。

問四 傍線部④の内容として最も適切な語句を問題文から二十字以内で抜き出して書きなさい。句読点等も一字に数えます。

問五 問題文の内容にそぐわないものをア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 子どもにとって、年長の仲間がキノコを見つけて喜ぶ姿は、キノコの価値を理解するものとなった。
 イ 珍しいキノコを見つけることは、子どもにとっても価値があり、その子どもにとって大きな喜びだった。
 ウ キノコを探し求めることは、子どもにとって我を忘れて熱中できることだった。
 エ 子どもにとって赤茸の美しい色は心に残るものだったが、キノコとしての価値はなかった。
 オ キノコの価値はキノコそのものの存在にあるが、その価値は子ども一人一人の体験に基づくものである。

問六 問題文の（1）～（5）に入る適切な語句をそれぞれア～コの中から選び、記号で答えなさい。

ア しかし イ きっと ウ もはや エ ともかく オ すなわち
 カ たとえば キ だから ク おそらく ケ もちろん コ もし

問七 波線部①～⑤のカタカナを漢字に直しなさい。

二 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。なお設問の都合上表記を改めたところがあります。

学問と社会とは、さほど大なる相違のあるものではないが、学生時代の予想があまりに過大であるから、面倒なる活社会の状態を見失って、意外の感を催すものである。今日の社会は昔とは異なりて種々複雑となっておるから、学問においても多くの科目に分かれて政治、経済、法律、文学、または農とか商とか工とかいうがごとく区別され、しかもその各分科の中においても、工科の中に電気、蒸気、造船、建築、探鉱、冶金などの各分科があり、比較的単純に見える文学でも、哲学とか歴史とか種々に分かれて、教育に従事するもの、小説を作るもの、各々その希望に従って甚だ複雑多岐である。ゆえに実際の社会において各自の活動する筋道も、学校にありし時、机上において見たごとく分明でないから、とすれば迷いやすく誤りがちになる。学生は常にこれらの点に注意して、大体に眼をつけ大局を誤らずして、自己の立脚地を見定めねばならぬ。すなわち自己の立場と他人の立場とを、1に見ることを忘れてはならぬ。

元來人情の通弊として、とかくに功を急ぎ大局を忘れて、勢い事物に拘泥し、僅かな成功に満足するかと思えば、さほどでもない失敗に落胆する者が多い。学校卒業生が社会の実務を輕視し、實際上の問題を誤解するもの、多くはこのためである。ぜひともこの誤れる考えは改めねばならぬが、その参考として、学問と社会との關係を考察すべき例を挙げると、あたかも地図を見る時と実地を歩行する時とのごときものである。地図を披いて眼を注げば、世界もただ一目の下にある。一国一郷は①指順の間にあるごとくに見える。參謀本部の製図は随分詳密なもので、小川小邸から土地の高低傾斜までも明らかに分かるようにできておるが、それでも實際と比較してみると、予想外のことが多い。それを深く考慮せず、充分に熟知したつもりで、いよいよ実地に踏み出してみると、茫漠として大いに迷う。山は高く谷は深し、森林は連なり、河は広く流れることもある。道に導かれて進むと、高岳に出会い、何ほど登っても頂上に達し得ぬ。あるいは、大河に遮られて遠方に暮れることもある。うし、道路が迂回して容易に進まれぬこともある。あるいは深い谷に入って、いつ出ることができるかと思うこともある。到る処に困難なる場所を発見する。もしこの際、充分の信念がなく、大局を觀るの明がないなら、失望落胆して勇氣は出ず、②自暴自棄に陥って、野山の差別なく狂い廻るごときこととなつて、遂には不幸なる終わりを見るであらう。この一例は、学問と社会との關係の上に応用して考えてみると、ただちに了解し得ることと思うが、とにかく、社会の事物の複雑なることを、前もって充分に会得して、如何に用意していても、實際には意外なことが多いものであるから、学生は平常③一層の注意を払つて研究しておかねばならぬのである。

洪沢榮一「論語と算盤」

問一 問題文の 1 に入る語句として最も適切なものをア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 客観的 イ 対照的 ウ 直接的 エ 相対的 オ 全体的

問二 傍線部①の内容として最も適切なものをア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 指図することができるとある関係にあるように イ 両手のひらの上にあるように
ウ 指で数えることができるように エ 指し示してかえりみることができるよう
オ 指先の間くらの距離にあるように

問三 傍線部②の意味として最も適切なものをア～オから選び、記号で答えなさい。

ア あわてふためきうろたえるさま イ 自分の言行によつて動きが取れなくなる
ウ 自分で自分を粗末に扱うさま エ 自分がしたことへの報いを受けること
オ 自由自在に動き回ってしまうこと

問四 傍線部③とはどうすることを意味しているのか、問題文から三十五字以内で抜き出して、書きなさい。
句読点等も一字に数えます。

問五 問題文の内容にそぐわないものをア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 現代では、以前と比べて社会が複雑化し、学問も多方面に分かれている。
イ もともと人の心に共通している害として、全体のなりゆきを考えることを忘れがちである。
ウ 学問と社会との關係は、地図を見る時と實際に歩いていく時の違いと同様である。
エ 地図で見てよく分かっている、實際に歩きだしてみると、はるかに広くて迷ってしまうことがある。
オ 学生時代に、社会の複雑さを予想して、自分で理解していれば、社会に出てからも成功することができる。

三 次の①～⑤の漢字の部首名として正しいものをア～コの中から選び、記号で答えなさい。

① 新 ② 起 ③ 属 ④ 園 ⑤ 引
ア まだれ イ そうによう ウ りつとう エ ゆみへん オ えんによう
カ あみがしら キ おのづくり ク とかんむり ケ くにかまえ コ りっしんべん

四 次の①～⑤の作品の作者名をそれぞれア～ウの中から一つ選び、記号で答えなさい。

① 走れメロス ア 武者小路実篤 イ 芥川龍之介 ウ 太宰治
② 智恵子抄 ア 中原本也 イ 島崎藤村 ウ 高村光太郎
③ 学問ノス、メ ア 坪内逍遙 イ 福沢諭吉 ウ 谷崎潤一郎
④ 流れる ア 有吉佐和子 イ 幸田文 ウ 与謝野晶子
⑤ 山椒魚 ア 井伏鱒二 イ 中野重治 ウ 尾崎紅葉

五 次のア～トを組み合わせて四字熟語を五つ作りなさい。解答は(例)アイのように、記号で語順どおりに答えなさい。

ア 集散 イ 深謀 ウ 正大 エ 方正 オ 万丈 カ 一転 キ 道断 ク 不言 ケ 琢磨 コ 離合
サ 遠慮 シ 博覧 ス 言語 セ 爛漫 ソ 公明 タ 無双 チ 天衣 ツ 熟慮 テ 波乱 ト 碎身